

1. 戸建コープ住宅の共用空間の人間－環境系デザイン

あいの里コーポラティブ住宅建設組合
(北海道札幌市)

I. 活動の背景と目的

①活動の目的

14世帯からなる札幌・あいの里の戸建コープラティブ住宅において、屋外コモンスペースと集会所の共用空間づくりをとおして、その活動が居住者の意識や生活行動に働きかけ、居住者自らが協同の意味を問い合わせし、より生き生きとした住環境づくりへと向かう、居住者と環境の間に相互浸透性のある人間－環境系のデザインを実践する。

②活動の背景

今から4年前の1995年1月、雪国の住環境の可能性を最大限に生かし、雪国ならではの課題を克服し、居住者と環境が分かちがたく結びつき、本当に美しく、豊かな生活風景の創造をめざして、札幌市北区あいの里地区の1,000坪弱の土地で戸建コープラティブ住宅をつくろうと、14世帯で建設組合を設立した。その後、基本計画づくり、住宅・都市整備公団のグループ向け宅地分譲への応募、土地の取得、さらに我々独自の地割り、建築協定の締結、デザインガイドラインの検討をおこないながら、3期にわたる住戸の設計・建設を経て、1997年12月にようやく14世帯全戸の住宅が完成した。今後は「共同庭」(700-900m²の屋外コモンスペース)と「共同アトリエ」(集会所的な施設)の共用空間の整備・建設を予定している。

これまでのプロセスでは、居住者同士はもとより、コーディネーター、設計者、施工者との間でも互いに知り合いになり、仲間意識も育ってきた。が一方では、住宅完成後のトラブルの多発が主な要因となって、相互の信頼関係が危ういケースも出てきている中で、今回の共用空間の計画、設計づくりは、関係者一人一人が協同の意味を問い合わせし、相互の信頼回復をはかり、あらためて当初の目標に向かって進む、重要な機会になるだろうと我々は考えている。このことはまた、ひろくコープラティブ住宅建設一般に対して、共用空間づくりのあり方や、人間と環境との間に生き生きとした応答関係をつくり出す人間－環境系デザインの計画論、設計方法論を考えるモデルケースになるものと思われる。

II. 活動の内容

①共用空間の計画、設計のためのワークショップの開催－現場からの課題の発見、イメージの発想

この活動前の状況は、各戸の住宅14軒はすでに建っていたが、その住宅群に取り囲まれた共同庭は整地もされておらず、自然の雑草が生えた、いわば単なる空地としてあった。共有地に建設予定の共同アトリエは、ごく初



共同庭と各住宅

期に基本構想がつくられただけで具体案はなかった。こういう状況にある共用空間の計画、設計にあたり、各々の家の目の前にある共同庭を普段の生活の一部として使うことが何よりも大切であり、それを積み重ねながら将来のあり方を考えようとした。この共同庭の現場からの可能性や課題の発見、将来イメージの発想をめざしたワークショップは、以下のように全部で7回おこなった。

1回目は、ゴールデンウィークさなかの天気のよい一日、まず共同庭に簡易ベンチを設置(ブロックを脚として、その上に足場板にベンキを塗ったものを置いただけ)することからスタートし、そこに各自、食べ物、飲物及びキャンプ用のテーブルを持ち寄って昼食会-「持ち寄りランチタイム」をおこなった。その後、メインの「共同庭、共同アトリエをどうするか」をテーマとするワークショップをおこなった。各自ポスト잇に自由に意見を記入し、それをボード上の模造紙に貼り付け、集約し、整理した。いろんな意見が出されたが、共同庭については当面、互いに往来できるように通路を確保し、バーベキューなどに使えるようしつらえて、みんなが自由に使えるようにする、という声が多かった。一方、共同アトリエについては、 unnecessary、仮設的なあずまやのようなものにする、費用などを十分に検討してちゃんとしたものを作る、という3つの意見に大きく分かれ、結論が出なかった。今回のように共同庭を暮らしの中で使っていきながら、今後も検討していくこととなった。その後、夕方からバーベキューパーティーへと流れ込んだ。



共同庭でのワークショップ

2回目は、メンバーの小谷好子さん企画の「羊をモチーフにしたミニタピストリーのワークショップ」をおこなった。参加者はメンバー5世帯の他に、小谷さんの親戚・友人、地区的大学生など、外にも開かれたイベントとなった。途中の昼食(各自弁当持参)をはさみながら10時半から16時半までの6時間かけて、二股の木の枝に麻糸で縦糸を織り込み、いろんな種類の毛糸で横糸を織り込んで羊を表現するミニタピストリーづくりに励んだ。17時頃から前日に引き続きバーベキューパーティーへと突入。メンバー4世帯がさらに加わり、総勢大人17人、子供10人が参加。

3回目は、前々回のワークショップの結果をもとに、共同庭に関する決定事項を協議。その結果、各自、自由に使ってよいこととする、ただし歩ける通路を確保する-具体的には、共同庭を通り、敷地全体を東西に横断できるよう、各自の敷地境界から最低30cmずつ(あわせて60cm以上)通路として確保し、その通路に面しない隣同士の境界についても、必ず通り抜けできるようにしておくことに決定した。結果として、すき間の多い多孔質な空間になった。その他、樹木については、日当たりへの影響などを考えながら、自由に植えても良いが、具体的な問題が生じた場合にはみんなで話し合うこ



テントを張って子どももキャンプ

とした。

4回目は、敷地境界の杭を現状の木杭から、より安全で、耐久性のあるコンクリート杭にするための協議を、業者を交え、共有地および各戸の敷地を歩き回りながらおこなった。

5回目は、市販のコンクリートブロック数十個を購入し、それを使って共有地のまん中あたりに、現場で試行錯誤しながら、約 115cm × 75cm の大きさの炉をつくり、バーベキュー用の網と鉄板が2組おけるようにセッティングした。夕方から早速バーベキューパーティーをおこなった。

6回目は、民間のテレビ局から、親子のふれあい、親子で楽しめる情報、話題など、親子をキーワードとする企画番組で、我々の共同庭での暮らしぶりなどを取り上げたいとの依頼を受け、共同庭のコンクリートブロックの蓋として既に購入済みのステンレスボックスをテーブル代わりとして午後のティーパーティーをおこないながら、その取材に応じた。

7回目は、夏休みの子供キャンプを年長の子供達が中心になって企画し、大人がサポートしながら実施した。共同庭にテントを3つ張り、その中や共同庭で子供達がそれぞれ思い思いの遊びをし、夕食には子供達自らが調達した材料を使って焼そばをつくって食べ、近くの公園で花火をし、テントで就寝した。

②会誌「あいの里コモン」の発行

ワークショップは居住者全員の参加が原則だが、やむをえず出られなかつた人もいる。こういう人への情報提供をはじめとして、居住者全員がこれまでの活動成果を再確認し、次なるステップへの検討材料となるよう、会誌「あいの里コモン」を発行した。

今年度1年間の主な活動のうち、上記7回の共用空間の計画、設計のためのワークショップと、下記の共用空間の基本計画案の作成等を編集した。A3判（基本は黒と緑の2色）とA4判（基本は黒と赤の2色）の2種類、フルカラーで、1998年分は1～7号、1999年分は1号の計8号を発行した。

③共用空間の基本計画案の作成

1回目の共用空間の計画、設計のためのワークショップでおこなつた「共同庭、共同アトリエをどうするか」をテーマとするワークショップの結果をもとに、3つのタイプく一つは、当初の基本構想どおり、コスト（イニシャル、ランニングとも）の検討をした上でちゃんとした共同アトリエを建てる。二つは、仮設的なもの、例えばあづまやのようなものをつくる。三つは、共同アトリエは建てない＞について、それぞれの特性、長所・短所などをはつきりさせて皆が比較検討できるように、共同庭を含めた共用空間全体の基本計画案（配置図、平面図、立面図、断面図、イメージスケッチ、コスト概算）を作成した。



会誌「あいの里コモン」

④共同庭の仮設的なタープの実施設計

共同庭は、ワークショップ、数度のバーベキューパーティー、子供キャンプなど、いろ

んなことに利用されてきた。「共同庭、共同アトリエをどうするか」ワークショップの中で、共同庭の今後により一層の利用促進をはかるには、雨よけ、風よけのための仮設的なタープの設置が求められた。

これを受けて、共同庭の仮設的なタープの実現をめざして、その実施設計（配置、規模、形態、シート・ポール・ワイヤー・ネット等の材料一式、コスト）をおこなった。当初は市販のタープのようにすべてが取り外し可能なものを想定していたが、風の強い土地柄を考慮し、一部のポールとフレームについて基礎を打って固定する方式とした。この固定ポールとフレームは、風向きに応じて防風シートを張ることのできるよう配置を工夫し、また荒漠とした現在の共同庭空間に新たな領域をつくり出すものとしても考えられている。

⑤共用空間の人間－環境系デザインの評価

我々がめざす共用空間の人間－環境系デザインは、居住者一人一人が自分の敷地と住宅だけでなく、共用空間を自分のものとしてとらえ、その環境に働きかけをおこなうと同時に、環境が居住者の働きかけを誘発するような、居住者と環境との相互浸透的な関係である。そして、これをきっかけに町並み景観、街区、さらには周辺をも含む、我々を取り巻く環境全体へと関係が広がることも視野に入れている。

今回の活動は、その初動段階として位置づけられるものである。共同庭への簡易ベンチの設置、持ち寄りランチタイム、「共同庭、共同アトリエをどうするか」ワークショップ、バーベキューパーティー、羊をモチーフにしたミニタピストリーづくりのワークショップ、共同庭に関する決定事項の協議、コンクリート等の境界標の設置、自前の炉の設置、午後のティーパーティー、夏休み子供キャンプなど、共同庭を舞台におこなったいろんな活動は、遊びを主としながらも、真剣な話し合いもあった。これらは居住者が共同庭に働きかけたものであるが、例えば子供キャンプのように、共同庭の環境が居住者の働きかけを誘発した側面もある。いずれにしても、これらを通じて、居住者にとって共同庭がより身近な存在となったことは間違いない。とくに子供達にとっては、夏休みキャンプにおいて、大人の手をほとんど借りずに自前で企画・実施し、中学2年生の最年長者から小学校前の幼児の最年少者まで、縦のつながりがより育まれ、自立と協同の生活を体験した。この体験がベースとなって、将来共同庭にどのような働きかけをするのか楽しみである。

しかし一方では、これまで住宅レベルでいろんなトラブルが生じ、物理的にも精神的にもその問題が未解決であると思っており、その問題が納得いく形で解決されない限り、共用空間に関して将来の姿を自らの問題として考える精神的余裕がなく、ステップを踏んで前進する状況はない、という居住者も数世帯あった。そのため、当初予定していた居住者全員参加の「計画案のコンペ」やそれをより具体化した「原寸確認と予算配分ゲーム」ワークショップは実施できなかった。ねらいの一つでもあった関係者相互の信頼回復には、より多くの時間が必要であることを痛感させられた。



羊をモチーフとしたミニタピストリー
のワークショップ

III. 活動の効果及び今後の課題

先の共用空間の人間－環境系デザインの評価でまとめたように、共同庭を舞台にいろんな活動をおこない、居住する大人にとっても子供にとっても共同庭がより身近な存在となつたことが最大の成果であり、今後、共用空間の人間－環境系デザインがより一層展開できるような種を蒔いたと思っている。

今後の課題として、

- ①冬になると共同庭にはゆうに1mを超える大雪が堆積し、各戸の屋根からの落雪が危険であることもあいまって、夏場のように気軽に集まって生活を楽しむことができない。そのため全くといってよいほど交流の生活が途絶えてしまう。「冬の共有生活の場」が必要で、それがどういうものか知恵を出し合い、実現すること。これは我々だけの問題でなく、北海道他の雪国の地域に大いに役立つはずである。
- ②共同庭をより活発に利用する（決して無理をするのではなく）プログラムを作成すること。今春の仮設的なタープの実現をきっかけに、共同庭を計画的に運営する母体をつくることを考えたい。
- ③居住者だけでなく、周辺住民など広く外部の人々との開かれた関係をどのようにしてつくるか。

の3点をあげておく。

